情報公開文書

臨床研究内容　ホームページ公開用

1. 研究課題名称

大腿骨近位部骨折術後の嚥下障害はフレイルと術後肺炎が媒介して生じADL改善の阻害要因である

2. 研究の背景・目的

日本では、大腿骨近位部骨折患者は経年的に増加しており、重大な医療問題となっています。特に、大腿骨近位部骨折術後の日常生活動作の改善は乏しく、長期的に自立歩行能力低下や要介護状態への移行、死亡率が高いことが問題となっています。近年、この日常生活動作改善を阻害する新たな有害事象として、術後の嚥下障害が注目されています。高齢者肺炎の背景には、全身の予備能力低下を示すフレイルが深く関与することが指摘されています。骨格筋量の減少や炎症反応の遷延といったフレイル特有の病態が、咽頭・喉頭機能の低下を介して発症を誘発している可能性も推察されます。しかしながら、術後の嚥下障害の発症メカニズムは未だ不明であり、特にフレイルが嚥下機能に及ぼす因果関係は十分に解明されていません。

一般的に、大腿骨近位部骨折術後の嚥下障害の有病率は5.3～55.0%と報告されています。年齢、女性、術後せん妄、受傷前の施設入所、呼吸器や神経疾患の既往などが危険因子として報告されています。術後の嚥下障害の評価時期は、周術期の72時間以内や退院時など研究デザインにより異なります。しかしながら、多くの先行研究は早期手術による術前の絶飲食管理を前提としており、術後に生じた嚥下障害の横断的な評価に留まっています。そのため、術前から術後にかけて、フレイルを含む全身状態の悪化が嚥下機能に及ぼす影響を縦断的に追跡した研究は少なく、嚥下機能変化のダイナミクスは明らかではありません。したがって、術前からの嚥下機能変化を厳密に評価する必要があります。

本研究は、先行研究の課題を踏まえ、術前から術後にかけて縦断的に嚥下機能の変化を評価します。具体的な評価手法として、術前と術後の嚥下スクリーニング(水飲みテストおよび機能的経口摂取尺度)に加え、術後は言語聴覚士および医師による嚥下内視鏡検査を実施します。これにより、客観性の高い嚥下障害の発生率を正確に把握し、受傷前のフレイルがその独立した関連因子であるかを検証します。本研究の目的は、大腿骨近位部骨折手術を施行した症例における術後嚥下障害の発生率を縦断的に明らかにし、受傷前のフレイルがその発症に及ぼす影響を検証することです。さらに、術後嚥下障害の発生において、術後の肺炎が媒介因子として機能しているかについても検討します。加えて、術後嚥下障害が術後の日常生活動作改善に及ぼす影響を検証します。

3. 研究内容

カルテより以下の情報を収集します。収集した情報を分析し、大腿骨近位部骨折手術後の嚥下障害の発生率、発症前のフレイルとの関連、嚥下障害が日常生活に及ぼす影響を明らかにします。

観察項目例）
入院前フレイル、術後嚥下障害や肺炎の発生の有無、日常生活動作の改善度合いなど

4. 対象者および期間

対象は、当院にて大腿骨近位部骨折の診断にて手術を施行し、リハビリテーションを実施した65歳以上の患者とします。調査期間は、2019年9月1日～2026年2月28日の期間のデータを分析します。

5. 個人情報の管理について

データの集計の際は患者名をコード化し、個人を特定できないように配慮します。また、研究終了後は5年間データ開示できるよう管理し、以降は個人が特定できないようにデータを破棄します。

6. 研究期間

研究実施許可にから2027年3月15日までに実施します。

7. 医学上の貢献

大腿骨近位部骨折手術を施行した症例における術後嚥下障害の発生率を把握し、フレイルとの関連が導かれ、術後の誤嚥性肺炎が及ぼす因果関係および日常生活動作改善への影響が検証できた場合、整形外科病棟における嚥下機能管理の重要性を再認識させ、リハビリテーションにおける意思決定に役立つものと考えます。

8. 研究機関

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部

9. 連絡先（研究責任者）

上記研究対象期間において該当になる方で研究に対して不都合がある場合や研究に対してご不明な点がございましたら下記の連絡先まで連絡をください。

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部　原山永世
805-8508　北九州市八幡東区春の町1-1-1　TEL:093-671-9318